

長谷川 太（はせがわ・ふとし）

1、プロフィール

詩人。昭和 32 年第 2 回県詩祭にて県知事賞受賞。一戸謙三等から影響を受ける。東奥日報、同人誌「榎」「ぱんせ」「寓話」「蘇」「いかるす」等に作品を発表。

<生没>

1928(昭和3)年 12 月 22 日 ~ 1973(昭和 48)年 7 月 29 日

<代表作>

長谷川太遺稿集『風の歌』

<青森との関わり>

黒石市生まれ。青森師範学校卒業。黒石中学校、青森市立野脇中学校等に国語・音楽の教師として勤務。

2、作家解説

長谷川太は本名で、東奥日報投稿時のペンネームは「永瀬暖史（ながせあいし）」「瀬川冬（せがわふゆ）」を用いることもあった。昭和3年、黒石市で長谷川半三郎の長男として生まれる。長谷川家は旧黒石藩の家臣で、法華宗妙経寺の寺宝を奉持する旧家であったが祖父の代に没落している。県詩壇の代表的存在である一戸謙三は、父半三郎と従兄弟同士である。

青森師範学校在学時、弘前市において一戸謙三と出会い大いに影響を受ける。この頃より合唱サークル誌に作品を発表しはじめる。卒業後中学校教員として勤める傍ら、藤田勇三郎発行の詩誌「榎」、竹内二郎発行の「ぱんせ」に作品を発表した。また東奥日報文芸欄に応募し度々入選する。「ぼくは歌う／ぼくはおりてゆく／せまい夜と昼との谷間／そこに捧げられたぼくの空(中略)ぼくは歌う／ぼくは生きていく／そこに倒れるぼくのかげのひとつひとつ／黒い疲労と敗北をもやしなから・・・」(「谷間にて」東奥日報入選)

昭和 32 年より石黒英一、蒔苗実、安岡一次らの詩誌「寓話」の同人となる。同年 11 月第 2 回青森県詩祭にて県知事賞受賞。昭和 38 年より藤田等の詩誌「蘇」「いかるす」に作品を発表する。「激しい喜びのしぶきをあげて／やっとなってきたと／波よ／力尽きたように溶けてしまった／砂浜に わずかばかりの泡を残して／すっかり汚れてしまった／これが波の幸せ」(昭和 46 年メモより:『風の歌』所収)

昭和 47 年 7 月末期ガンと宣告され、昭和 48 年 7 月 29 日死去。多数のメモが枕元より見つかる。「＝前半略＝／ぼくが死んだら／暮鳥の「雲」を読んでくれ／ヴァレリーでなく／シュペルビエールでなく／エリオットでなく／「おうい雲よ」と／繰り返し繰り返し／呼びかけるばかりで終わったぼくの／ささやかな未練をみんなに伝えておくれ」(「ぼくが死んだら」48 年 7 月 29 日－枕の下にあったノートから－)

3、資料紹介

○『風の歌』

図書

1975(昭和 50)年 8 月 23 日

194mm × 133mm

言語のセンスときらめくりズムの中に官能と虚無的な思考が交錯する 20 代の作品、自らの生き方や作風についての刷新に挑む 30 代の作品、自らの死を予感しながら自らを写真的に捉えたり周囲との関わりの中に自らを見出す晩年の作品を集めた遺稿集。